

Title	比較文化史：周辺文明の存在
Sub Title	
Author	有富, 英洋(Aritomi, Hidehiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1969
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.41, No.4 (1969. 3) ,p.124(622)- 125(623)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究発表要旨 彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19690300-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

昭和四十三年十月三十日 於第一会議室

ヘレニズム・ローマ時代のサマリアについて 小川英雄

昭和四十三年十一月十三日 於第二会議室

歴史家としてのベエダに関する一考察 高橋 紀子

テマ制度について 矢部 莊

イギリス実証主義についての一考察 森 淳子

昭和四十三年十二月二〇日 於五一三番教室

ヨーロッパの史跡を訪ねて 平山 栄一

研究発表要旨

マーシャル・プランについての史的考察

小川 決子

マーシャル・プラン自体がもつ意味は、直接には第二次大戦後の西欧経済復興に果たした役割として評価されるのであるが、これを西欧統合化問題の観点から考えてみるのが課題である。

このマ計画に対して統合化の概念を関係づけさせているものは具体的機構としてのOECEの存在である。これは米国により復興資金供与の反対給付として設置を要求された資金受入機構であるが、問題はこの機構がその歴史的発展の過程において、ECSC、EECに認めうる経済共同体を準備する母体となつていくこと、及びこの機構成立の基礎条件が統合機構として米国により初めから要求されている、ということの二点から、OECEとマ

計画に対する統合概念の付与可能性の確認、及びマ計画を基礎として発展する西欧統合の性格について、当然その米的イニシアチブによる西欧の統合化であること、とが指摘されるという点にある。そこでこれらの問題点はマ計画当時の米国の政治的経済的事実を分析することを通して明確にされるべきであり、これは特に現実問題としてOECEに対する政治的圧力と、かつ、OECEを通しての米国の輸出経済の成長との二側面においてマ計画にもりこまれた西欧統合化要求への米国の政策的意図を探り出すことが可能である。即ち、統合経済による西欧の再建と米的に再編成された経済市場設定への構想をマ計画の中に認めうるのである。

従つて西欧統合問題の見地においてはマ計画はその統合化の促進要素としての性格と、更にはこの促進要素自体の米国的性格を呈示するものであり、こゝに現代の西欧統合化を西欧と米国との関係において考察させるに至るマ計画の史的立場づけが可能となる。

比較文化史—周辺文明の存在

有 富 英 洋

第一次世界大戦以後、文化と文明が歴史研究の主要課題として認識されるようになる。その直接のきっかけは、ドイツの哲学者オスヴァルト・シュペングラの「西欧の没落」が当時のヨーロッパに異常なセンセーションをまきおこしたことによる。第一次世界大戦がヨーロッパになぜおこつたかを長い歴史の目で見つめ

るこの著書は、歴史の考察を文明単位でおこなうことを主張し、その構造と変動の規則性を明らかにした。この主張は、第二世代とも呼ぶべき、何人かの著名な研究者にうけつがれる。その中でアーノルド・トインビーは著書「歴史の研究」十巻をはじめとする多くの文明の研究で、特に有名となる。しかし現在は、この専門分野の第三世代とも言うべき若い研究者を輩出しつつある。彼らは、それまでの研究成果を土台に、より精密に、より科学的に、歴史研究を進める。そのなかでもフィリップ・バグビーの「文化と歴史」は、それまでなおざりにされていた、文化及び文明の定義を明確におこなっている点注目される。とかくバラバラな個々の例をあげていたにすぎぬ文化と文明の概念は、彼の努力により明確なものとなった。加えて多くの批判に答えて出したトインビーの「再考察」は、彼の欠点とされた理論的説明の欠如をおぎなっており、充実した理論の展開がなされている。歴史における文化と文明がよりはつきりした存在となるためには、それぞれの基本的性格をもう一度再確認する必要がある。第三世代の研究者の成果を見ながら、文化と文明の基本的性格の再確認をおこなってみたい。そのあと、実際の例を考えてみたい。ともかく、比較文化史Ⅱ文明論は、今その基本の再検討の時期にあらう。

Beda の歴史的作りに関する一考察

—Historia ecclesiastica gentis Anglorumを中心として—

高橋 紀子

Beda は Northumbria の Wearmouth Jarrow 修道院の敬虔な修道士であり、多くの著作を残したが、特に彼の歴史的作りのために偉大な歴史家としても高く評価されている。彼の代表作ともいえるべき Historia ecclesiastica gentis Anglorum (「イギリス教会史」)を中心として、彼の実証的精神及び史観についての考察を行った。彼の実証的傾向を知る為に必要と思われるので、生涯の略伝を書く事によつて彼の修道士及び学者としての誠実さを知る様に努め、次に彼の歴史的関心を生み出すと同時に「イギリス教会史」を書く為の基礎となつたと思われる年代学、年代記及び聖徒伝について考察し、それが「イギリス教会史」において、いかに発展され、いかなる点に実証的精神があらわれているかという事、更に作中の幾つかの事件及び事柄を通して、いかに彼の史観があらわれ、それがどの様なものであつたかという事を考察した。

テマ制度の成立

矢部 莊

テマ (Tema) 制度は七世紀頃より実施されたビザンツ帝国の属州行政組織である。最近二十年間のテマ制度論争はテマ制度が何時発生したかという問題に論議が集中した。この根底にはオストロゴルスキーによつて代表される従来の定説への批判がある。即ち七世紀の前半に自由農民層の増大による社会的基礎の断層的社会変革が起つたという定説への批判の一環がテマ発生論争であ